

働き方改革を、
とうの昔に実践していた管理者文
伊藤公一

text by Kouichi Ito

日本中が新型コロナウイルスの脅威に揺れる今月11日に、野村克也氏が虚血性心不全のため84歳で、この世を去った。

テスト生で入団した現役時代には南海で大活躍し戦後初の3冠王。ヤクルトや阪神、楽天の監督として3度の日本一に輝く名将として知られた氏の訃報。日本のメディアはもとより、米国ニューヨーク・タイムズ紙も異例の追悼特集を掲載。「戦後の日本球界の大黒柱」と讃えている。

それも当然のことであり、生前より、その業績は多くのビジネス指南書ともなり、単なる偉大な野球人を超越した存在であったわけだ。そして今、ID野球^{*}と言われる緻密な戦略や、他球団の戦力外選手を再生させた指導実績など、故人の数えきれない業績が、あらためてクローズアップされている。

そこで小生が特に着目、尊敬する二つを紹介する。

一つ目はプレイングマネージャー。いわゆる選手兼任監督として長年にわたり、実績をつくったことである。

教え子である古田敦也氏や、中日の谷繁元信氏も捕手として同様の道を歩んでいるが、野村監督がバイオニアであるう。

考えてみれば、9人の選手のうち捕手だけは、バッターボックスに立つ相手選手と同じ方向に視線を置いている。鬱

陶しいであろうキャッチャーマスク越しに、そのポジションは司令塔としての役割を果たしているのであろう。

それら我々の業界に例えれば、院長の役割は、正に捕手である。そして大きな病院の院長業務は会議中心だが、中小病院の院長任務はプレイングマネージャーに一致する。実際に自身も一選手として外来診療や手術を担当しながら監督を務めているが、それは難事業と自覚している。

そこで野村監督とはいえ、最後の選手年限までリーディングヒッターではなかったわけだ。おそらく引き際と他者への信頼、業務委託が絶妙であったのだろう。

もう一つは江夏豊氏や高津臣吾氏といった名投手を抑えの切り札に起用した名采配である。今では高校野球でも甲子園に出場する強豪チームともなれば、複数のピッチャーが役割分担を果たしているが、昔は優れた投手イコール先発投げ切りが常識であったわけだ。

日本のプロ野球に先発、中継ぎ、抑えという概念、勝利の方程式を根付かせたのも野村監督の功績と言われているが（敗戦処理選手を選ぶのは辛そうな仕事だが）、これこそが、昨今の「働き方改革」実践の先駆けと思えば、あらためて尊敬をするばかりだ。

おそらく野村監督は、どのような組織

の上に立つても偉大な管理者であったのであろう。
ノムさん、本当にお疲れ様でした。ご冥福をお祈りします。

※ID野球＝Important Dataの略

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。
北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。
東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。
日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。
伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/>
名古屋甲状腺診療所（名古屋分院）<http://www.kojin-kai.jp/nagoya/>
さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院）<http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

